

早稲田大学人間科学学術院教授 佐藤将之先生をお迎えして、新型コロナウイルス感染防止対策を講じた上で、第3回は初めてオンラインと対面式を選択して受講するハイブリッド研修を、第4回は対面式で受講する研修をそれぞれ行いました。施設によって、環境は多様だと思います。研修の内容で、取り入れられることを、「とりあえずやってみよう」を合言葉に話し合い、実践を繰り返していただけたらと考え、講義の内容をお伝えします。

「とりあえずやってみる」を積み重ねて理想の環境に近づけていきましょう

《 保育環境を考える 》

- ・大前提は「思い」と「環境」をつなげること。物理的環境の意味や価値を理解することが大事です。
- ・環境というと、つい見栄えするものを考えますが、どこに視点を置いて「すてき」と言うのか考えることが大切。誰のための環境かを考えましょう。子どもにとって、落ち着ける場所なのか？色彩、配置、空間、動線はどうでしょうか？環境は保育を考えるきっかけになります。
- ・環境を変えるとき、保育者の思いや環境、それに保育力をアップする機会であることを意識しましょう。
- ・子どもの視点を持ち、思い思いの落ち着ける部屋にしていきたいと思います。

《 音環境について 》

- ・部屋の「響きすぎ」が保育を邪魔することがあります。
- ・音には「直接音」と「反射音」があります。直接音は直接耳に聞こえる音で反射音は反響や残響と言われるものです。吸音材で反射音を減らすと、直接音がクリアに聞こえるようになります。
- ・吸音力の高い部屋でテストを受けた子の方が点数が高くなった例や、保育者の頭痛が治った例もあります。
- ・欧米の保育園や幼稚園では、騒音や残響の基準が定められています。残念ながら、日本は保育園や幼稚園の音響に関する法律はありません。
- ・いろいろな実験を試し、現場の人が部屋の騒音について知らないといけません。
- ・部屋が響き過ぎていないか簡単に知る方法は、静かな部屋で拍手を1回してみます。1秒くらい響きが残ると響き過ぎていないことになります。対処法として次の2つの例をご紹介します。

①騒音を抑えるためスポンジのような輪天井につけた例



②部屋にクッションを置いた例



【参加者の感想】

- ・音環境に着目したことがなかったが、日々の保育の中で、物音や声で頭痛がすることがあったので、子どもたちにとっても落ち着けない要因になっていたのかと感じた。
- ・“劇的に変化させなくても大丈夫。少しずつで良い”という先生の一言に少し心が救われた。
- ・ちょっとずつやる、少しずつ進めるというスモールスタートを直ぐにやってみようと思った。
- ・「何をどうしたいのか？」という言葉が一番印象的だった。子どもたちの成長と共に遊び方も変化する。次のステップや経験してほしいこと、改善したいという思いが湧いてくるが、どうしたらいいのか解らないのが現状。そんな時は、「とりあえずやってみよう。」を実現し、効果と課題を繰り返しながらそのときに合った環境を整えていきたい。
- ・子どものための保育園であるが、労働者のための保育環境であることにも着目していいのだと思い、もっと良い保育につながる保育環境、居心地のいい休憩室になるよう園で報告します。